慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古写本を覗く
Sub Title	
Author	太田, 次男(Ota, Tsugio)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1994
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.29 (1994.) ,p.1- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000029-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古写本を覗く

太 田 次 男

のか、 うことで、〈あぁ、またか〉ということが、おそらくしばしばであろうと思うわけでございまして、それから、今の<u>固</u> 時にいろいろ話しておりますことが、〈あぁ、またか〉と、思いながら聞いていることが多いだろうと、まぁどういう りまして、いつも三時になりますとコーヒーと御菓子が出る。で、皆んなで雑談いたしておりますが、 いてお話を伺ったことがありますが、そのとき、二回同じことをおっしゃった、ということで、私も一種、 に、これはとても比べるわけには参りませんけれども、 したことがございます。柳田先生とでは天と地程の違いがございますが、ふと思い出したもので……。 しましても同じことを繰り返す、あるいは固有名詞がなかなか出てこない、というようなこともございまして、それ 私は只今、成田山の仏教研究所というところに勤めておりますが、ここにいます史学科出の湯浅君が嘱託で来てお 今日はお忙しいところをお出でいただきまして、どうもありがとうございます。だいぶ年をとりまして、 しまった、ということもあるのですが、しまったと思わないでそのままになっていることもあるでしょう。とい 記憶のパターンがそうなりまして、ある一つの話をしていると、必ずある話がついて出てくる。で、話した直 柳田國男先生の最晩年に史学科で先生に三田にお出でいただ おそらくその 感慨を催 話をいた

有名詞のこともそうなので、 今日はなるたけ固有名詞を省きまして話ができたらと、こう思っております。

の研究生活で何時頃からその覗くことが始まったのかとか、その種の話のために、ちょっとそれ以前のことも交えま 今日は内輪の会でございますから、 お手元の表に即してお話をいたしたいと思います。 たか、 という一覧表を元にいたしまして、そして今日の題を「古写本を覗く」と奇妙な題に致しました。 私の恥を曝しまして、ここにお手元の、 斯道文庫あるいは少し前からどんなも

てそらいら名講義を二年間も聴きながら、それが何にもならなかったのかと、詰問されそうです。実は、私にとりま 呂敷包一杯に、本を持ってお供されました。〈大風呂敷を広げるというのは正にこのことだな〉と、こう思いましたの ノートを取ったという記憶がございますが、 創められまして、 けでございまして、私も御多分に漏れず、もともと古い本というものにはそれ程関心がなかったと申せましょう。 たとえば、 たしましたが !無かったかと申しますと、そうではないのです。御存知かもしれませんが、私は昭和十七年の九月に繰り上げ卒業 私は史学科の出でございますから、 何がとび出すか分らないという期待感のなかで、もう手品師のごとく、 国史大系の中に入っている『今昔物語』、これは到底お話にならない本だと、まぁそういうことが起こるわ 私はそれこそ陶然としてノートも取りにくいくらいにしていた記憶がございます。 古写本にも余り関心が無かったわけですけれども、それではそういうものに興味を持つようなチャ (いわゆる学徒出陣の前年)、昭和十六年と十七年に幸田成友先生が初めて、「書誌学」という講 史学科でこれを講義されました。私、 史学科と書物というものは、どうも昔からあまりうまく結び付かな 幸田先生とご一緒に、元、 非常に興味を持ちまして、一番前に陣取りまして一所 図書館にお勤めの太田 次から次へと貴重書を出して見せて それではお前、 臨一 郎さんが 、つも風 ンス

が

ながら、 ことで、 と、まぁそういう実に幼い疑問なのですが、そういう疑問を持ちましたもので、全く新しい世界への入口まできてい にも書きましたが、 して、この講義は学部で聴きました講義の中では一番刺戟を受けた授業でございましたが、これは前に『三田 **う仏書をお出しになるたびにですね、「私はお宗旨のことはわかりませんよ」と、そういうことをたびたびおっしゃ** 〈一〇八八〉〉という有名な本でございますが、それをお出しになって、しかじかというご説明がございます。こうい 『成唯識論』という本がございまして、これは南都で刊行されましたもので、つまり春日版の『成唯識論』(寛治版 私はそれがどうもあまり気に入らなかった。お宗旨、内容がわからないで、本の外形だけで一体いいのだろうか 何となく終わりました。 しかも相応の刺戟を受けたのに、結局は、史学科においては書誌学というのは補助学に過ぎないんだという なぜ幸田先生にのめり込まなかったかと申しますと、そのお話の中でですね、例えば仏書の中に

宮下さんに「グンドルフがまた復活してきたんですか」とお尋ねしました。ちょうど、宮下さんの学位論文の審査の かったと思いますけれども、少くとも私なりに刺戟を受けました。二、三年前にこれは復刻になりまして、 入り、それから、 ました。これを読みまして、非常に大きな刺戟を受けたのです。つまり、シェイクスピアがドイツにまず素材として ピアと独逸精神』という翻訳が、これは東大の美学科の竹内敏雄さんという方が訳されて岩波文庫で二冊になって出 ですが、ちょうどその頃にですね、ドイツの著名な文芸学者でフリートリッヒ・グンドルフという人の『シェイクス いうものを説いてあるわけで、これがまた、まことに絢爛たる文章でして、おそらく私には本当には理解できていな 学部のころ私は漢籍がどういうふうに日本に入って来たかという、 内容として受け容れられると、そういう過程を、階段を付けてそのシェイクスピアの受け容れ方と 漢籍受容史というようなことに関心があったの

のは外的なものだな〉というような認識を持ちまして、結局、この学問にはどうも近付いていけなかったというよう 著作にはほかに 報告を聞いていましたところ、グンドルフが批判的に引用されておりましたので、宮下さんならわかるかも知れな 「お宗旨のことはわかりませんよ」というお言葉がどうもピッタリとこない、ということで、〈ああ、 お尋ねしたのですが、大勢に余り影響もなさそうだということでした。 『ゲーテ』という大著だとか、いろいろありまして、私はこれらにも影響を受けておりましたもので、 戦後は殆ど知られておりませんが、

るまでここにおりました。 したが、 のかわかりませんが、まぁそんなことを仰られたことがありました。そういうことで、卒業以後のらくらしておりま で九年もいて、よくこんな仕事をしているなぁ」と、おっしゃられました。こりゃ一体、 ところに御本をお借りに行きましたら、「まぁ泊まってゆけ」というわけです。そのときに「君は軍隊で五年、 その前に軍隊に五年おりました。これはずっと後のことになりますが、まだ犬山に横山重先生がおられ なわけでございます。 ところで、終戦後になりまして、わたくしは自分の出た中学 昭和三十六年、その開設と共に斯道文庫に入りまして仕事をするということになりまして、それから退職 (新制高等学校)だとか、あるいは塾の普通部に九年 褒め言葉なのか貶し言葉な た頃、 普通部 先生の

けですから、本そのものに対しては、 の一考察」というところから斯道文庫に入った後でございます。斯道文庫に入りましても、 の史的考察」という、これまでが普通部におりました時に書きましたものでございまして、 それで論文の一覧表を御覧になっていただきたいと思いますが、 興味が無いというわけではないのですけれども、その書誌的なことについての 五番目にあります「平安時代における白居易受容 いま申しあげたようなわ それから 「韓愈について

して、 性というものを非常に感じまして、 **う思うようになってまいりました。つまり、マックス・ウェーバーのお蔭で、そういう官人というものの理解の必要** だから、そのためには官僚制というものが十分理解できなければ、詩そのものも本当には理解できないだろうと、そ 調査をすると同時に、 というわけで、そこでこの「韓愈についての一考察」から「柳宗元の山水記について」までの四篇が、 それぞれ既に書物を調査され、 い方の知識がまだ無かったのです。ところが、ほかの所員は、たとえばここにおられる平澤さんにしても、 日本においても、 マックス・ウェーバーに『儒教と道教』という名著がございますが、これを読みまして、非常に触発されま 三年間で書いたものでございますが、この間は一つ、改めて大学のマスターコースに入ったつもりで、 論文も書かなくちゃいかん、という立場にたたされました。そこで、お読みの方も多いと存じ むろん中国におきましても、 論文に書くような材料は持っている。 図らずも、ここに、 詩人の本業は官人(官僚の中国的表現)であり、官僚であるの 書物関係以外の論文を書く立場が固まってきました。 ところが私はまだ何も持たない。 所員になりま こりゃ困った 皆さん

ですが、少くとも私にとりましてはこれが少しはためになりまして、 てるんだ。昔と同じことやってるじゃないか」というようなご批判を頂いたようです。それはその通りに違いないの ました。それと同じ手法で柳宗元も書いたわけでございまして、当時、ある人から「あいつは斯道文庫に入って何し 内部資料を得るためにそう考えましたので、つまらない論文ですけれども、「韓愈についての一考察」を書くに当って 愈を全部、 そのために韓愈の全作品を曲がりなりにも読みまして、それで「官人生活を中心として」という副題にして書き 私の考えといたしましては、たとえば韓愈なら韓愈のある特定の詩を読むのではなしに、韓愈を読むならば韓 全作品を読まなくてはいかん。柳宗元なら柳宗元の全作品を読まないとやっぱりわからないと、つまり、 その後、このときの基礎というものがずらっと

今でも役に立っております。その意味では無駄ではなかったと思っております。

たと申してよろしいかと思います。 そのときに発表いたしましたものが今の表にあるものです。そういうことで、遅まきながら、やっと入口に辿りつい が当番校に決り、 きっかけができることになりました。これはちょうどその前の年に第何回かの日本中国学会がありまして、 にする人なのですが、ずっと、宗性のものと睨めっこをしてまいりまして、そこで古い本というものに接する最 で、中世に於ける東大寺きっての学僧である宗性というお坊さんの自筆本に存分に触れることができました。この人 集要文抄』について」でございます。東大寺の図書館(このときはまだ旧館)にまいりまして一週間ばかり籠りきり の書き残したものは、いま全部が重要文化財になっているというように、非常に筆まめで、物を写すにしても本格的 それから今度は、私が初めて本格的に時間をかけて古い本に接するというのが、その次の「東大寺宗性の 奥野信太郎先生から、来年は「お前、 出ろ」と仰せつかったもので、それならと宗性を調べまして、 来年は塾 『白氏文

く見ました。それでもわからないところがあるので、その少し前ごろからいろいろ教を受けておりました山田 から、自分のところへ来てくれ」ということで、上野の博物館に何度か通いまして、小松さんのお部屋でこれを詳し まして、展示の責任者で博物館の小松茂美さんに希望を申しましたところが、「ひとつそれじゃ返さないで置いとく の『新楽府注』という小さな本が展示されておりました。なぜか興味をもちまして、これを何とか翻字しようと思い というのがございますが、ちょうどその前年に五島美術館で白楽天関係文献の展示会がございまして、そこに真福寺 にまで影響の続いたことについて述べます。表の中に「真福寺蔵『新楽府注』と鎌倉時代の『文集』受容について」 それでは「覗き」なるものは何時始まったんだ、ということになるかもしれませんが、比較的早い頃のもので、 忠雄先

なものが鎌倉にたくさんできておりました。今、鎌倉市に笹目という所がございますが、当時は、 間違いもある、 したらいいか〉ということで、更に内容を吟味致しますと、当事者は、元来、あまり学も無い人のようで、 にくいところがしばしばあるわけです。そこで、いろいろ苦労いたしまして、〈それじゃ、これを翻字するのにはどう のとの両方を写し取る必要がある。そこで、これは墨の色が違いますので、その差は判りますが、墨が重なって読み 原文にかなり筆を加える必要があったわけです。そうしますと、こちらは、前のものと、 幕府の上の人をも含めた人達に講義をしている、そういう性質のものだったと思いますが、そうなれば、当然、その いうような箇所が非常に多いわけです。一度切ったところを「候」に改めてみたり。つまり、お坊さんが恐らく鎌倉 書いたところに少し黒い、つまり本文より濃い墨で重ね書きをしまして、一度書き写したものを、書き直していると れがまぁ私にとりましては難物というか、どうもそのときの講義そのものの筆写のようなんですね。ですから、 に於いて写す」とあります。その本を私、翻字いたしまして、ここにその翻字のところだけ持参いたしましたが、こ まして、そこで白楽天の『新楽府』の講義が行われました。さき程の書物にそういう奥書がありまして、「佐々目ヶ谷 なっております。 しました。これは鎌倉時代に仁和寺とか醍醐寺とか、そういう京の大寺の、まぁ言ってみれば出張所兼宿泊所みたい 生にご同道願いまして、ご一緒に見ると、 はおもしろくない。そこで、直らない前のと直った後のと、それから誤字は誤字で出す、ということにしようと、 いまの鎌倉駅からじき近い所のやとで、そこに昔、遺身院という仁和寺系のお寺がございまして、今は廃寺に 誤字も多いわけですから、その誤った個所を全部きれいにして、直った形で翻字してしまったら、こ いま行ってみますと、そのやとはもう全部、家が建っておりますが、そういうところにお寺があり 山田さんにもわからないところがあるというようなことで、 それから書き加えられたも 佐々目ヶ谷と呼ば いろいろ 一度

の翻字というものに対して、これがいろいろ考えさせられる一番早いケースだということになります。 若うございました。とにかく、正誤の両方を出すとか、書物の現状を可能な限り、ありのままに再現しようとか、 ことなく、 活字にしましてはどうもうまくいかない。そこで全文、手書きにいたしまして、番号を振り、 して、強く印象に残ったはじめての作業と申せましょう。このときは実はまだ覗いてはおりません。この時分は疑う そういうことに致しました。そうしますと、活字にしにくい個所も多いので、 元はこうなっているとか、こう直してあるということで、その全部を注に挙げました。これが私の本というものに接 肉眼の威力を信じて、 自分の目だけでやるのが当り前だと、そういう自信をもって見ておりました。 これは手書きにしなければならな 注を付けておきました。

という意味で、良いルーペだと思っておりまして、いまでも勿論これは使っております。そういうことで、そろそろ にはほとんどこれで用が足ります。十倍のルーペというのは、 高い筒型のものですが、そのルーペを使いましたところ、おお、良く見えるなぁと、そのときは 「覗き」が始まるわけでございます。 いなぁ〉という感じがいたしました。その後、ルーペというと、大体十倍のものを使っておりますが、 その後、 ルーペを使うということ、そういう知恵が出てまいりました。それでまぁ大体五倍のルーペを、 妙に拡大もされないで、ごく自然な大きさに伸びる、 へやっぱり肉眼より 普通の場合

ことがチラッとあったもんですから、下のほうは、 下は出しておりませんが、 ついて」というのがあります。 そこで、その次に参ります。下から七番目ぐらいのところに、「大東急記念文庫蔵『白氏文集』金沢文庫本の復 実はその雑誌の奥のところで川瀬一馬氏が「ずいぶん印刷にお金がかかる」というような これは大東急記念文庫から『かがみ』という雑誌が出ておりまして、それに上下……、 出すのをやめましたが、とにかく上の一篇を載せてもらいました。

もう一回、完璧にやりたい、そうしてこれを活字にして出そう、それまで生きられるかどうかわかりませんが、それ そうと、いま考えておりまして、その一巻だけは既に実施したのですが、その後、時間がどうしても取れませんで、 使っていた頃かと思いますが、私いま、これからお見せ致しますこの大きいルーペでですね、もう一度、全巻を見直 この前後あたりから、『白氏文集』をやるには金沢文庫本を完璧に調べなくちゃいかん。これがもっとも大事なことだ ころにポッポッポッポッと火が燃えているようになるので、十分ぐらい目をつぶっておりますとやがて消えるのです は解けない所がある、という代物なのです。ですけれども、 文庫本というのは本格的にみますと簡単には読めない。その影印本が出ましたけれども、写真版だけでは到底正確に をやり終えたら、何時この世を去ってもいいと思っておりますが、そこまでやれますかどうか……。とにかく、 と、そう思いまして、 が、まぁそういうことも時々ありまして、悪戦苦闘いたしました。 ーペ程度でこつこつと見まして、毎日九時から四時まで見ておりますと、どうも眼がちょっと、 これは二十何巻ありますが、これをこつこつと少しずつ……。このときはまだ五倍のルーペを はじめの頃は、 まだ肉眼を信じていた時代ですから、 眼の周りのと

に私が乎古止点から全て、写真だけでははっきりしない、いろいろ見たものをすべて書き入れまして、 ておられました。もちろん金沢文庫本も校勘の資料の中に入っていたのですが、遠方からでは大変と思ったもので、 「なんなら、金沢文庫本に関しては私が全部いたしましょうか」ということを申し上げましたら、「あぁそうしてくれ ところがちょうどその頃、 これはありがたい」とのご返事で、「そのかわり、大きな写真に引き伸ばして、それは提供するから」というこ 斯道文庫ではちょっと伸ばせないくらいの大きさの判にですね、 正確には大分前からですが、京都大学の平岡武夫先生が白氏文集の本文の校訂作業をし 全巻、その写真の紙焼を頂戴しまして、それ 一巻が終ると

にきますと非常に時間をとられるわけなのです。そこで知恵を働かしましてですね、ちょうど机のところに蛍光スタ こらいらような箇所がですね、まぁ続出というわけでもないですが、かなりたくさんあるわけです。こういらところ そのものも胡粉の剝落によりよく判らない。それから、その下の元の字も、 ンドが固定されてありますので、その蛍光灯に巻子本のその個所を近付けますとですね、その元の字が浮き出して少 るところが剝げ落ちる……。 まぁこういうようなことなのです。ところが、 よぉく見ますと、どうも「白」という字の下に、もと何か文字が書かれていた、というように見えるのですね。 両方からの協同作業でした。私の方もここに改めて、もら一度、金沢本全巻を細かく調べることになったわけです。 その都度お送りするように致しました。そうして、それによって校勘作業の中に反映させると、 やっている間には、いろいろむずかしい個所もありました。たとえば、「白司馬」という三字があります。これを これをこう胡粉で、 この本では(板書しながら)全巻に亘って同様の処理方法なのですが、元の字がありまして、 塗ってしまいます。塗ってしまいまして、その上に「白」という字を墨で書き加えると、 ま、 そんなことで、原、下に何か文字があるらしいけれども、 胡粉というものは剝落をいたします。ですから、この 重ね書きの墨と重なり、また、 それが中々つか まぁそういうような それを直すとき 「白」という字 胡粉があ

在のテキストはもう「魯司馬」というテキストは無いわけです。全部、この「白」になっておりますが、そうすると しました。ところが、文集を全巻見ますと、「魯司馬」という個所は他にもある。それを白司馬と直してある。 (板書しながら)「魯」であるということが判ったわけです。 さっきの「白」なども、そのために大部長時間、 この一字だけに引っ掛かったかもしれませんが、 その夜、 あの個所が わかりましたと平岡先生に電話も致

しは見分け易くなってくると、そういうことも試みました.

だけが見えたという箇所です。 な「長恨歌」の一節で、その後半、死後の楊貴妃のところに玄宗皇帝のお使いが面会する場面の会話の一節です。 これは何といったらいいか、私は「原金沢本」と名づけました。 うな積極的な心情を表現する、 かなり旧態を留めている可能性が大きいといえましょう。 れています。実はこの の「問」については、さっきの「魯」が下にあったというのと同じ扱いをしないで、何も触れずに、「視」だけが採ら を抹消しまして、「視」に改めているわけです。私はそれを書入れの注で示してあるのですが、平岡先生の本では、こ を採っておるわけです。ところが、この「視」をよく見ますと、さっきと同じようにですね、 を回らして下を」の次、ふつうはですね「望む」とあります。下、人寰の處を望めば、長安は見えないけれども、 ほうが解りやすい。 のです。どうも、ここも難所で仲々解らなかったのですが、ようやく、それが「問」であることが判りました。 「視」というのがありまして、「下、人寰の處を視(み)れば」というふうになりますが、いまの金沢本もこの が全く無いわけではないのです。この巻十二は入唐した恵萼が書写した六十七巻本が底本になっておりますので、 原文では 後塗粉改作白」と、そういうふうになっております。もう一つ、同じような例をあげます。 「問」とあると注記するだけで、金沢本の原文字の「問」の方は抜けてしまっているのは残念でなりませ 「頭を回らして、下、人寰の處を問えば、長安は見えずして塵霧をのみ見る」とあったわけです。 ところが、 「問」という字は、 現在のテキストは全部ここで「望」を使っております。 非常におもしろい文字だと私は思っておりますが、まぁ一寸見には 後で消してしまった、ということなのですが、惜しいことです。また、平岡先生のだ 中国の『文苑英華』にも使われているわけで、ですから、そういうテキス とにかく、この「問」という字は、これは身をのり出すよ いまの平岡校本では、このところは、「魯金沢本原文 ところがもう一つ、旁注に 原、下に何か字がある (板書) これは 視 それ 有名

ん。このときも、まだ五倍のルーペぐらいを使って見ておりました。

これは彼がどこまで自覚的であったかはわかりませんが、とにかく日本では、たとえば藤原道長が宋版本を手に入れ はっきりと書いているわけなんですね。その本文の違いはどうしているかというと、これも写本で直しております。 捜して揃えたかったけれども無い巻があった。だから、止むなく宋版本を底本にして、これを写したというふうに 行ったことになります。 版本と古い写本の違いがあったところは、さっきのような形で、全部古い写本の字の方を活かしています。ですから、 らことが、実際に両本を比べた結果出てくるわけです。そこで、彼はどういう態度をとったかと申しますと、この宋 写し、その後もら一つ、今度は別に写本と校比しています。写本と比較してみますと、かなり違いが出てきます。とい それを写しているわけです。それが巻三十一。それと巻三十三の両巻がそういうものであったのです。 写本になっていて、宋版本そのものではなかったのです。それに気が付いていたかどらかは定かではありませ 交っています。この底本はむろん宋版本に違いありません。 という人が単独で校勘作業をしたわけなのですが、本人は知ってか知らずか、版本を写したものを底本に使った巻が る、まぁ当然これはありうるわけですね。一体、金沢文庫本の『白氏文集』というのは、これは鎌倉時代に豊原奉重 本と申しますが、中には版本をまた写したという、つまり、巻により宋版本を底本にした古写本というものもありう それからもら一つですね、 それから、この金沢文庫本の巻三十一に触れます。我々は金沢本といえば、(板書)旧鈔本ですとか、あるいは古写 版本の字を消して古い写本の文字の方に直している。つまり、結果から言いますと、 底本が版本であった、 巻五十四というのがありまして、これは彼が確かに版本と知っているわけです。写本を 版本系の本というものを旧鈔本で直したと、そういうことになります。 それを彼が写し取ったのですが、彼の写した底本は既に 写本に近付ける作業を 奉重はそれを

と、まぁそう見ざるをえないというふうになります。このように、いろいろな問題がありましたが、大分時間をかけ まして大喜びしているということもありますけれども、テキストとしては、やっぱり鈔本のほうを上位に置いている

まして、全巻これを終わりました。

乎古止点とか、そういう朱書の個所は全部消えてしまう。これではあまり使い物にならないので、上野に国立文化財 を当てて、つまりその光によって、さき程の消した原文字を浮き立たせながら上から写真に撮ると、まぁそういう方 研究所というのがありまして、そこの写真部の責任者の橋本弘次技官と親しくなりましたので、「何かいい方法は無 式なのですが、そういう方式のものが既にできていたのには驚きました。 テーブルの上の板の代りに大きなガラスが張ってありまして、脚の下にライトが四つ付いている。だから、下から光 もう埃だらけのものを出してきたのですが、これがまた私が考えていたのとピッタリ一致するわけですね。 云い「そういう道具なら、うちにありますよ。ただし、一回も使ったことは無いんですがね」ともつけ加えて、 さっき私が申しました蛍光灯に近付けて見るというのを、今度は写真のほうに応用すると、まぁそういうことになり ラスの板にし、テーブルの下から光を当てながら、ガラス台上の巻子本を撮影することはどうかということでした。 いですかね」と相談しました。そのとき、私案として、こちらから提案したのですが、テーブルの上の板を大きなガ ました。さっきのいろいろ直されたところを赤外線で撮ればいいかなぁと、そう思ったのですが、赤外線にしますと、 それから、このような眼に映じた写本の実態をそのまま何とか良い写真で撮っておきたいと、そういうふうに思い 橋本さんにこう言いましたところが、彼はポンと膝を叩いて「いやぁ、そういうものなら確かありますよ」と みると、

それではこれで東急のものを全部写そうということになりまして、 東急では貴重書は門外不出である、 という

などしたところが良く出ております。 まして、今の装置で金沢本を全部撮りました。今、影印本で出ているその写真と比べますと、はるかにその直したり イヤーと普通のタクシーと、どれだけ違うかわかりませんが、とにかくそういうことでですね、四往復ぐらいいたし なかなからんといわなかったのですが、それなら往復全部ハイヤーで行くなら許可する、ということで、ハ

て非常に時間をかけてやったものでございます。 非常にいい写真ではないかと思っております。そういうことで、白氏文集の金沢文庫本というものが、私にとりまし 方式で写しました。この方式で、目で見たものが瞬時に消えないで、写真にそれに近い状態で残したという点では、 ちょうど天理の、あの美土代町の展示場で展示替えがあるので、そのとき本を持って行くから、貸してあげますよと いうことで、神田の駅で「じゃあ持ってってください」と、いとも簡単にですね、お借りしまして、それをまた同じ しようかということで、木村三四吾先生にわけをお話ししましたら、「それなら持って行きますよ」ということで、 また、巻三十三というのは、この一巻だけ天理図書館にありまして、 調査は済んでおりました。この天理のをどう

原本にもっとも近い形でするには、どうしたら一番良いものができるだろうか、ということをいろいろ考えました。 なかったのではないかと思いますが、そのために、非常に時間をとりました。もっと早く気がついていたらと思って おります。とにかくこれ以上、難しい写本があるだろうかなどと、そういうふうに思っておりましたのですから……。 それから次に、こういう写本から翻字するにはどうすればよいかが問題になります。活字にして出して、しかも、 私、このごろは、高野山金剛峯寺蔵『聾瞽指帰』という本の翻字をやっておりますが、たとえばですね、(板書)こ ただし、このときはまだ「覗き」も徹底しておりませんで、さっきの五倍か、精々十倍、十倍は終り頃にしか使わ

なれば一種のたたかいと申せましょうが、考えてみますと一向改善の兆しは認められませんね。その頃考えた一番良 るわけです。これは翻字作業に対する、現在も続く、実際にこれを印刷に付するまでの、正体と別体字とを繞るいう 異字体がつねに常用されたわけです。ところが、これを全部正字に直してしまうということになりますと、これはむ 翻字する場合には、全部正字に直したというようなことがまだ多いわけです。丁寧に扱っているといえば成程そうな 安時代からどんどん使っている、ふつうに使われているわけです。ところが、こういう字が交じっていても、 ういう 字だけにするにはどうしたら良いかと、私もいろいろ考えておりました。先程触れました全文を手書きにするという と思いますが(二回ばかり実行しました)、そこまでちょっとお金をかけられないということはあるわけですから、活 のものに即したやり方に近づけるというようなことになりますと、 のが実情といえます。全部これを正字にしてしまう前に何か良い方法はないでしょうか。 う方式ももちろん考えられているわけですけれども**、** ま我々が使っている字のルーツを探れば、この辺に辿り着くというわけで、筆で書くわけですから、当然、そういう のですが……。ところが現実には、弘法大師の時代からその別体字や略体は盛に使われておりました。ですから、い にすれば一体どうするか、ということに、またなるわけです。そのうえ、朱である乎古止点とか、先ほど申しました 方式もありまして、これも一つの手ではありますけれども、何時でもそうはいかないということになりますと、活字 しろ実際とはかけ離れることになります。今、正字でなしに略体は全部略体にし、別体もそのままに活字にするとい 方法は、 右のページに写真を影印にして置きまして、左のページにそれを活字でいれると、それがまず基本になる 寧、 来、 礼 舎、 頼、 懐、号、真、 讃…)、いま我々が常用漢字として使っております字は、 印刷上のいろいろの制約があって、妥協せざるを得ないという 結局、 別体字をどこまで生かすかということにな ほんとうにその本の本文そ もう平

直したところとか、 いかということは、 また後ほど述べますが、そのころ非常に頭を悩ました問題でありました。 原文字をどうするとか、 欲張ればいろいろ難しい問題が加わりまして、それを一体どうしたら良

判りました。聞いてみますと、 な話もありますが……。 ラーにしましょうか」というのに対して、 すれば完全に実物が朱まで全部正確に写せるということにはならない、 に出すために、 旁りなのですから、こういう、ほとんど直角に書きまして、今と形が違っております。ところが、その朱の仮名を見 印本とを比べて見たわけですが、そうしますと、とくに朱で書いた仮名文字というものが、これは撮影のとき写され 写し出せるか、ということなのですが……。 たそのままのものではなしに、 示する別館ができまして、そこに調べに行きまして、そこの聖徳太子関係のものを、 いうことを言われたんですね。それは止めたほうがいいと、 それから、五島美術館でですね、あるときに、金沢文庫本の『白氏文集』を全巻カラーで出しましょうかと、 そのために鎌倉時代にいまのレという字体がある、 と思いまして、 レは皆いまの字体になっている。 後で旧 その実物を見ますと、 い片仮名の字体の知識のない職人が手を加えている、 もっとも、 やはりそうなんですね。たとえば、(板書)古くはラリルレ カラーは後から職人が手を加えて朱を入れている、という操作が加わっていることが 最近は写真印刷の技術も一段と進んだと聞いております。 即座に、「カラーは 実物はまさしく古体が使われています。 (板書) ちょうどそのころ、 〈おかしいなぁ、鎌倉時代の本なのに、どうしてこんなレがあるんだろ なんていうことになってしまうわけです。 私は即座に申しました。カラーですれば、 止めたほうがいい」ということを申しました。 上野の博物館に法隆寺の書物や資料などを展 ということがわか そういうことが平気で行われて つまり、 実物とそれからカラーにした影 ロのレは、 9 てまい カラーの朱の色を明瞭 つまり、 りま 元来は 実物を正確 まぁそん カラーに 一礼の た ーカ

先生の仰せ言があったとか……。 恐縮した、という話を高橋さんがしておりましたが、まぁそういうことで、六日間。「六日も見せたのは初めてだ」と 田邸に行ってこれをお借りしてきて……。終ってからも、大学の貴重書の書庫か何かに入れるなんていうことは、こ うことで、大学の高橋正隆さんという方が、滋賀県の守山から来られるのですが**、** そろそろ頃合かな、 そのお祖父様という方が非常にたくさん本を持っておられた。むろん、御本人も沢山持っておられます。 ですから、見る条件はそちらを優先しなくてはならないので……。 で見ておりました。 神田邸にお返しに伺ったところが、神田先生が玄関の辺りで、もう行ったり来たりされていたとのことで、これには お宅と割合に近いところに大谷大学がありまして、そこの研究室に、午前十一時から午後六時までにしてほしいとい いら方はなかなか本をお見せにならない、といら評判なもので、まぁ恐れをなしてなかなか伺わなかったのですが、 いう奈良時代の白点を調べに来ていまして、「こんなにゆっくり見たのは初めてですねぇ」なんて言っていました。と 『中の『白氏文集』の巻三・四というのは、現在残っている文集では一番古い本といえます。ところが、 時になると神田邸に行って、それで持ってくる。それで六時になると返す。六時をちょっとでも遅くなりますと、 は絶対されない。 『文集』巻三・四です。 私がやはりかなり時間をかけましたのは、この右のページの上から七つ目ぐらいにありますが、 ということで、 白点を見るということは、こちらがこれは古い本なんだぞといっても、それより更に古い本なの 必ずその日の内に返さなくてはいかんということです。毎日、 ちょうどその時、 お願いをしましたら、見せるということで、拝見にまいりました。六日間、 神田喜一郎先生は御存知と思いますが、あの京都博物館の初代の館長をされて、 奈良時代のお経に白点が付いている本をもう一人の人が同じ部屋 その北海道大学の石塚晴通さんは 毎日面倒をみて下さいまして、 高橋さんが出てこられまして、十 そのご蔵書 神田先生と 毎日。 神

ころが、白点、 彼の本に光線を合わせると、どうもこちらは見にくくなる。 胡粉の乎古止点というのは、 朱点に比べてこれはまぁ非常に見にくい。ですから、 まぁこれは致し方ないでしょう。 なかなか見えな

言われるので、 版にして出そうという話があったわけで、 氏物語絵巻』が三巻所蔵されておりますが、それから一巻は五島美術館にあります。これを一緒にして絵巻物の写真 わけです。 ばそういうふうに書き入れる。そういう、つまり箆みたいなもので紙に空押しで字を書くのです。その空押を断 知のように、この……(板書)……ある字がありますと墨筆で仮名を振る。 こで初めて出会ったのでしたが、角筆を正確に見るということは、これはなかなかの難事です。 るとき五島美術館に来られて、 ましたら、 パラー、 それから、 箆みたいなもので、たとえばキならキという字を、 絵巻物というものの色ですね、撮影した後、 名古屋の徳川黎明会の徳川義宣氏のことをここで思い出しましたが、ご存知のように、 そういうことになりますと、くぼみの影が映りますと見易くなる、ということで、 紙にくぼんだところができる。ですから、これを見るには、本の真上から光が来ていては非常に見にくい 緒にというわけですが、五島美術館の方でも予て単独でカラーのが出来ていたのです。で、 俄然よく見えるのです。ですから、この角筆を見るためには、一つの条件が要ると私は思っております。 いまのこの神田先生のご本には角筆というのが非常にたくさんあるもんで……。 五島美術館側も急遽、どうするか相談したそうで、結局は写し直したということになったそうです。 出来たのを見ると、「こりゃ駄目ですね。こりゃもう一回写し直しましょう」と、こう 徳川さんは徳川家のものを全部カラーで準備なさった。 その色校正というものが非常に、これは難しいということです。 昔のキは「一」とこう書くことが多いのですが、 それから、まま、 まぁ一種隠したものの 午後の四時過ぎになり 私も角筆というのはこ 角筆というのは その徳川家に それから、 徳川さんがあ 五島美 たとえ 面で 御存

そうしますと、それと同じように、角筆を見るにも一つの条件があって然るべきです。 刊行されたときの解説で述べておられます。ですから、 校正は駄目だと、これが徳川さんの信念で、「時間がどれだけかかり、色合はせを何回必要としても、 蛍光灯の下では絶対駄目で、 を再現する」とか、「校正の際の視点、 晴天の午前十時から午後二時までに限られるそうです。この天然の光線じゃなけ 光線角度を定め、その時見える原本の状態に於て色を合はせる。」と、 カラー校正というものには一つのはっきりした条件がある。 原本に忠実な

時 思ったので、そこで小林芳規さんにですね、そのころ広島大学におられましたが、ひとつ一緒に見てほしいとお頼み そういうふうになりまして。ですから、角筆を見るためには、やはり複数の人が要る。 をつぶっていますと角筆が頭に、こう出てくるわけなんですね。まぁやっぱり、六日間、 どれもこれも角筆に見えてくる、ちょっと紙に皺が寄ってるのが角筆に見える。で、帰りの新幹線の中でちょっと目 複数の人が見るということです。一人だけではやはり、いろいろ……。 しましたところが、 に難しいいろいろな問題がありましたが、何とか調査を終りました。それで、その下の方にございますように、『神田 本白氏文集の研究』というのにまとめましたのですが、そのときにさっきの、これを翻字するにはどうしたらいいか 三色刷りになりました。 'か四時頃までかかりましたが、二日間かけて……。で、そのときは私が前に見たときの角筆のノートを、 私はそれで、 朱筆は朱で、角筆は緑の色で出そうと、そういうことになったのです。それに、墨の黒と合せますと、 角筆を調べるのに一番好条件のときといえば、午後の三時から五時まで、それからもう一つは、 承諾が得られましたので、今度は大谷大学の図書館の一部屋を使いまして、これは十二時から三 その前に、さっき申しました〈もう一度、これを他の人に見てもらったほうがいい〉と私は 私もそのとき見たのですが、みているうちに、 いまの神田本というのは非常 角筆と格闘しておりますと、 ちょうど

があるんですね。 鎌倉鈔本) に見にくいわけで、そのときには非常に苦労いたしました。もうそのときには、 小林さんも前に別にみておられたのです。そういうことで、二人はまったく独立して作った資料をもった上で、 国文科の大学院生だった當山日出夫君に持たせて、彼が「この字に施された角筆は何という字ですか」と、こう言う 度角筆をみ直して答えるという遣り方で、とにかく全巻を見終りました。 を拝見したときは、今度は先生のお宅で拝見したのですが、そのときは普通の和室でですね、 そらすると、 その書物にも、 小林さんが、それに時々私も直かにその本をみて「これは何だ」と、こう言うわけですね。 角筆がいろいろあったのです。ところが、真上から光が当たりますと、これは その後、 角筆も、 神田先生の別の書物 十倍のルーペで覗いていた 真上に電燈

れた上島有さんという方が世話役をなさっています。その方がこれをご覧になりまして、 れは毎年八月になると公開されまして、 す。で、私、この少し前までは、 が、そこに、この二つレンズの嵌まっております台を、こう付けますとですね、それで、倍率の高いルーペになりま 倍っていいますが、二十何倍位でしょう。これはもともとは単眼鏡でして、バード・ウォッチングもできるわけです のですが、いまここに持ってきておりますこれはですね、その時のより更にその一つ上のなんです。これはまぁ三十 ろうと思っております。その頃は、 それから、 私のほぼ満足できるような大きさに拡大されて見えます。 「実は花押の研究で、 このアサヒ・ペンタックスでですね、もう少し大きいのがある、という話を聞きまして、 その線を正確に見極めるにはどうしても拡大しないと駄目なのです。 もら一つこれより下の、もう少し筒の細いのを使っておりましたが、 もう十倍のもよく使っておりました。 調査に参るのですが、その催しは歴史の方でもと京都府立総合資料館に 昨年の夏、 洛南にある東寺観智院の古い写本を、 もう非常に興味を示さ ああこりゃ良 それを買った それで見まし お

い」ということで、その後、年賀状を見ますと、「自分も早速買いました」とありました。

れるものですから、私もアサヒ・ペンタックスの係の人に手紙を出しまして、「これにカメラが装着できないか」と いってあるんですが……。ライトの点で仲々むずかしいのか、まだ返事はまいりません。 もう一つ、これに写真機を付けて、拡大した状態のままで、写せないだろうかと、その上島さんが頻りにそう言わ

ませんが、 服が五十万円も入っています。えぇ、命の次に大事なんですよ」なんて言うもので、よっぽど〈あぁ安い命です く手に入ります。先年、ちょっとパリからイタリアのほうまで行ったのですが、そのとき、シャンゼリゼの通りのす やっぱり、 のですが、これが十七万円でした。カール・ツァイス製です。日本ではそんなものは、どうもあまりみたことがあり れはどうですか」と言って出してきのが、それは今までのと比べて、実にもう段違いに鮮明にみえる。それに決めた ひとついいのがあればというわけで、いろいろ出すんですが、なかなか気に入ったのが無い。で、最後に、「じゃ、こ ねぇ〉と言いたかったんですが(笑い)……。そのあと、さっきの店に入って、オペラ・グラスが古くなったから、 ぐ裏っ側に通りがありまして、そこに、光学器械ばかり売っている店があったのです。せっかく来たんだから、 ではとても買えない位ですが、これが一万二、三千円程度で買えるのです。日本の、こういう光学器械は良い品が安 して、それを地面に擦れるようにして歩いているのですが、「こんにちは」なんて言いまして、「いや、この中には洋 一つと思いました。その前に、シャンゼリゼを通ってみますと日本の女の人が大きなバッグ、紙の袋を持っておりま とにかく、日本のこういう機器類は非常に安いわけですね。凝り性のドイツのなんかですと、このぐらいで十万円 ドイツのなどをあちらで買いますと、そのくらいなわけです。ところが日本だと完璧とはいかないまでも ただ、ノー・タックスで、後で少し引かれまして、まぁ十四万ぐらいになりました。ルーペにしましても、

安く買えて、 感度、ピント、 その他、 まぁまぁ良いんじゃないかと、 満足しておりますが

すから、 に有名な人ですが、その正家が持っていた本から校異とか訓点など書き入れをしているのです。 れにもう一つ、 ることは 賢と、そう言われておりますが、この です。そこで、某大家なんかは早とちりして、 るわけです。『尊卑分脈』を見ますと、時賢なんていう人は何人もおります。で、大江家にも時賢という人がい か そのまま翻字しようかと、本気で思ったこともありました。そのうち、さき程の小林さんがこの本の訓点のことを書 始したわけです。この本は、 用致しました。このときは、 い。この(板書)、後一条院の系統の藤原氏ですね、この系統にも時賢がおります。すると藤原時賢。この人は侍従時 の最後の頃ですね、 れました。 それでは、 少し書き入れをもしていますが、 ということで、 私はこれを時賢本というのはちょっとおかしいと思っております。 確かです。それから、 この本は 少し大型のルーペを使ったのはいつ頃からだろうか、と申しますと、これは斯道文庫に勤務していてそ ほかに藤原正家の本も使われております。 一番下から二番目の、 (板書)ふつう「時賢本」といわれております。で、この時賢とは誰なのか、 結局、 私、 一番大きいのよりその下のを使いまして、ここで初めて大型のものによる「覗き」を開 この人であることはもうはっきりいたしますが、この人がこの文集の本文を書いてい これは菅原為長の持っていた本を底本にしてると、そういうこともわかりますが、 以前から、 大部分は、 『尊卑分脈』によれば 宮内庁書陵部の『白氏新楽府』元亨鈔本について書いた時など、 たびたび見ておりまして、 大江時賢だと、そう言ってるわけなんですが、 この人の父親の濟氏が行った作業であることが明になりました。 藤原正家という人は、博士家の人で侍読もやっている非常 「侍従」との記入はありませんが、 何種類かの違った色の仮名をですね、すべて むしろ大部分の作業は父親がしているの それでは辻褄が合わな で、 兄さんが侍従にな 時賢が本文を書 ということにな るわ

詳細にみますと、小林さんのだけではないことがわかったのです。 あるかということを、 分類をされまして、これに基づいて、最後に、前に触れました神田本の訓というものは一体そのどれがどの家の訓で それから黄色と、それから茶色と、こういうものは、これは藤原正家のテキストに拠るんだと、まぁこういうふうな 小林さんの論文ですと、墨訓ですね、 その校合の作業では、テキストの系統をはっきりさせるためでしょうが、たくさんのカラーが使ってあるわけ 論証しようとされているわけなのです。ところが、私、この写本に使われている色のすべてを 墨訓はさっきの菅原為長の訓であるとします。 それから今度は、

なり句読点なりを加えた上に、もう一度、 関しまして、その本の乎古止点、 こういう場合、これで見ますと、この機器の大きな効能が確かめられます。 なことはですね、 はたっぷり、その朱墨が多過ぎたためにはみ出してしまったのか、 ですね。ところが、こういうケースをこの大きいルーペで覗きますと、これはもうイチコロにぴたっとわかる。 はみ出したのだと、 他の人はですね、これは朱の……、何と言らか、朱墨がたっぷりしているので、それがダブついて、層をなしたため 発揮するかを申しますとですね、たとえば、 その前に、いま色について申しますが、この倍率の高いルーペというのは色に係わって、 肉眼のみで右往左往しないで、どうして新兵器を使わないのだろうか、 そういうふうにみるのですね。そういうふうな意見をお互いに言うわけで、まぁこれは あるいは句読点が少しどうもダブリがあると問題になりました。 ダブッて付けたのだと、まぁそういう意見を出した人がいる。ところが、 乎古止点について述べましょう。 あるいは重ねて二度付けたのかと、こういうよう あるとき、 と私は言いたいのですが 東洋文庫にある古い 一体どの程度その つまり、一度星点 一偉力を

23

ね り具合の判定など、 れたものが先なのか、 い墨はわかりますが、どっちが上か、つまり、どっちが後の筆かということは非常に大事なことです。 その両文字はわかりますが、ただしですね、その薄い墨と濃い墨と、じゃどっちが上なのかと……。 肉眼では仲々はっきり致しませんが、そんなときはこのルーペにお委せ下さい。 濃い墨で書かれたものが先なのか、 という判定は非常に大事なことなのですが、 こういう重な 薄い墨で書

いらわけではありません。申すまでもなく過信は危険です。ですが、肉眼だけの状態よりは少ぅし進んだところまで ておいて、これはまだはっきりしない、ということで済ますわけにはいかないのではないでしょうか。 ば、それはやっぱ う見ても断定しかねる、ということは多々あるわけで、これで見ればもう万能選手みたいに何でもかんでも見えると ん、ということになりまして……。そうなりますと、肉眼で〈まぁこうじゃなかろうか〉と、ちょっと中括弧に入れ のどちらであるかということの判断は下さなくてはいけない。 得ない危ないところをですね、 すと、ほぼ、 もっとも責任を持っていると思うのです。後から読む人じゃなしに、先ずはじめに調査した人が全責任を持って、そ だと全然わからない。朱と墨とが重なったとき、どっちが先でどっちが後なのかというようなことですね。 それから今度は、 我々は肉眼では、どっちかなぁと、 まぁそれはそのとおりなのですが、ただし、 ピタッと断定を下し得る、というところまで見ることができます。こういう場合にですね、 り断定はしなくちゃならないだろうと、考えるようになりました。 墨と朱ですね、その二つの重なり具合、これも実は場合により非常に難しい。 危ないところは危ないで、 確実性のない判断に止まることが多いのですが、この大きなルーペで見ま なるべく断定は避けなくてはいかんと、これ迄は考えて参 補助のものを使ってでも断定に近いところまでいけるなら そのためにはやはり、とことんまで調べなくちゃ 私はやっぱり、 とくに暗いところ もちろん、 調 査した人が 断定を下し こういう

訓練を経ないで、いきなりこれを使うということはもっとも危険だと思うわけで、 断定の範囲が広がりうるだろうと、そういうふうに私は見ております。 が、ここでも言えるんじゃなかろうかと、こう思うわけでございます。 対してある程度の熟練をした人が初めて使いうると。子供に刃物を持たせるということが危険だというのと同じこと ただしですね、私はこうも思っておりますが、ルーペはあくまでも補助の機器であるわけですから、 これが、使った結果についての偽らざる感想 あくまでもこれは肉眼で古写本に 肉眼での

す。ところが、もら一つ、薄い朱があるんですね、薄い朱が。ですから、こういう濃いか薄いかというようなことは、 理にお願いして、この色の注なんですが、ほんとに全頁、色の注ばかりです。この乎古止点は何色であるか、この仮 これを入れなくちゃならないというので、斯道文庫を辞めましてから、 氏新楽府』元亨写本について」といいます。ところが、どうしても、最後までこだわった色に関する注だけですね、 精しく調べますと、その色にはこれまで云われていた以上に、更に種類があるということが判って参りました。 たかと申しますと、 いまのルーペで見ますと、原則として非常に明瞭に、この区別ができるわけです。小林さんはこの薄い朱というもの そこでまた、書陵部の新楽府のことにもどります。その本で初めに触れました色のことを繰返しますが、その色を 一切区別していない。むろん、その濃淡の差はテキストの違いを示し、濃朱は藤原家本、薄朱は菅家本を表わしま そういうことが色々あるんですね。これは斯道文庫で五十九年三月ですから私の在職中の最後の小論です。「『白 (板書)今まで報告されていた朱というのは非常に濃い朱のことなのです。確かに非常に濃い朱が使われておりま この合点は何色であるかというですね、全巻の色だけに限って書いたものです。 一番の難物は薄朱と濃朱の限りない混淆です。二色の境がはっきりしなくなっているのです。濃 その次の二十一号、 何故、 昭和六十年三月刊のに無 そんなに時間が かかっ

同色の濃をただ薄くしたのではなく、 これにはほとほと困りました。 もし関心のある方があればもう一度見ていただければ幸です。 二つは色相を異にしています。 ところが外に、 単純に濃を薄くし

合点には全く触れられていませんので、 と解しております。 うことになれば、 しているようです。 見ましても、「合点」という項目が無いわけですね。ですから、 橋本進吉博士以来の合点についての説明なんです。 点が施されています。この合点にはどういう意味があるのでしょうか。 朱でヲコト点を施し、それから普通は墨で訓点を加えますが、この本では墨のほか色筆の訓が複数加えられ、 二つとか三つついているときに、これが一 この機会にもう一つ、色のついた筆で施された合点について述べます。 ある訓に青色で合点がつけられていれば、 とにかく、橋本博士が これまでの色筆による合点が少なからずつけられております。 つにはダブリの符号だと私は解しております。 これは一体何を意味するのか、 ところが、 つまり、 青い色で示されたテキスト 「合点とは、いくつかの訓の中の良いものに合点を付ける」とされ、 一つしかない訓に三つ合点がついている、 その論に、 番良い、 青色で示される写本にも同じ訓が施されていることを示す、つまり、 ちょっと理解しにくい。 そのことによって、当然、 小林さんもそれを踏襲しています。いま『国語学大辞典』 この訓が一 .の訓 ところが、 合点は一体どういうことかという解説は 番良いというときに、それに合点を付けると、 あるいは、 小林さんの論文では、この色のつい ある個所では、 国語学のほうでは、 (板書) ご存知のように、 赤、 私は以前から、 しかもそのどれもに色がついている、 黄色、 影響が生じることになる筈です。 これも同じなんですが、 一つの 合点には二つの役割がある 合点というものは、 訓に三つ これが今でも通用 漢籍の古写本には の異った色の わかり たのも含め その多 要する などを か 訓 ね 合 ま が

それからですね、

細かく覗いておりますと、こういうこともあるんですね。

橙色の筆による仮名が振られてい

, る個

所は多いのですが、 おられた文学部の西川新次さんに、 たった一か所ですが、上に橙の訓を重ねないで消したままになってるところが見つかりました。だから消し跡の緑の もっとありそうだ〉というわけで、全巻にわたって似た個所を調べますと、さっきのちょっと曇ったような箇所がた 現象がみえるのです。〈これはおかしいな。そうなると、この緑色の訓というのも、ここ一か所というのはおかしい。 郭が残ってるわけです。そういうようにそれが消されてですね、その上に橙色の仮名を重ねる、と。こういうような 郭だけがなかなか取れないとみえてですね、その全部じゃあないのですが、薄ぅくごく小さな点々を連ねたように輪 と緑色の仮名があったのが見えます。で、その緑色をきれいに拭い去っている。ところが、その下の仮名ですね、 に曇ったようになっているなぁと思われる個所があるので、さっきのルーペでよぉく見ますとですね、 の上に濃朱筆を重ねた個所が沢山あり、ここでは薄朱もそれが施されたことは、必ずや意味をもちます。そうすると る人なら誰でもやっているとのことでした。今の例では下の字が消されていますが、より影響がある例として、 全部消して、橙色に直していると、そういうようなことが分ってきました。しかも、そういうことに目が慣れてきま 輪郭だけが残っている。そういうようなことで、はじめ緑色の仮名も使われていたということ、それを緑色の仮名は くさん出てまいりまして、そのいずれも消してありまして、その上に、橙色の訓が重ねられております。そして、 まぁそういうようなことになって参りますね もう一つ濃朱の下にも緑があって消された個所が沢山あることも分ってきました。念のために、 墨が菅家点だ、 その色がですね、 あとはこうだ、 色筆をぬぐい去るように抹消する方法についてお尋ねしましたら、その道に携わ その周りが何かこう、 というこれまでの分類にもう一つ、これも菅家点として認めなくちゃいかん ボヤーッとぼけている。 ちょっと何か消したような、 橙色の下にも

すというのは、 になります。 に多いところから、「訓読する傾向がこの朱で示した本には多い」と、こういう一つの結論が出されているのですが、 色の合点が施されることもある。ですから片方は訓読で、片方は音読だけだ、 点がついていますと、これは又変ってきます。そうしますと、結論が全然違ってくる。それから朱筆の訓合符に 成程全体を見ますと、そらいう例はたくさんあるんで、そう見えるんですが、ところがですね、 んはですね、「音合符が墨であるから、音読する傾向が菅家点には非常に多い」とします。それから左寄りの合符が赤 それから、 その語の真ん中に線を施せば、これを音読する、ということは、これは皆さんもつとに御存知の通りです。 音読するわけです。 一方は音読だけだ、 ちょっといろいろ話が前後しますが、(板書)こういうことがある。漢籍でも仏典でも二字の語があると これは再考を要するのではないか、と、これは覗いた結果の結論です。 それからこれを訓読もしている、 他方は訓読だけだというようなことで、 仮名が付いています。そういう箇所があるとき、 博士家の読み方の傾向を結論的に示して出 というような単純なことではないこと 墨の合符に色筆の合 小林さ 他の

らば別ですが 『聾瞽指帰』 それから、 弘法大師の若書きで確実に自筆であるというものがあって、それと比べてみて、なるほど同じものだ、というな を拝見して」について述べます。このときはいまの、一番大きいルーペをフルに活用いたしました。 の古写本が現存しておりまして、これはいろいろ直したりなんかしてある。苦心の跡が歴然としているから は弘法大師の青年時代の自筆の本だといわれております。ただし、こういうものが自筆であるかどうか その後も覗きの活用範囲は広くなって、いろいろありますけれども、もう一つ比較的新しい これこれの理由があるから自筆だ、というように断定することはじつは非常に難しいのです。ですか 孤立した一点だけでそういうことを断定することは非常に難しい。ご存知のように、 聖徳太子の 現在、 瞽指

うことです。そうしますとですね、二字のうちで、下の字より上の字の方が後ということになって、おかしくなるん どう見ましてもですね、上の字の末画の延びのほうが上ということになりました。上ということは後から書いたとい ちょうどうまいことに下の「諦」の旁りの「丶」と重なっているのです。そこで、さっきのルーペを活用しまして、 らところまで詳しく拡大して見たのです。そうしますと、こういうことがあるんですね。「耳諦」という二字がありま わけです。そういうときにですね、さっき申しましたこのルーペで、(板書)上下の二字の墨と墨との重なり具合とい これはたいへんなことですから、 聖徳太子の自筆本だとします。それも条件の一つとはなりましても、それで自筆にまでもっていけるかどうか、そう らく筆者がさらに手を加えている(それが弘法大師かもしれないといえないこともありませんが)。 もら一筆加えて伸ばした、 によく見ますと、そこは二筆になっており、はじめの筆はちょっと短かすぎた。そこでもう一度、 ここを見る。 いうことはなかなか難しいと思います。この弘法大師の書といわれるのも、 に自筆とされるものと比べると別の筆致とみらるべきものと思っています。私には墨の擦れを補筆するというような ですね。全文のなかには、ここ一か所じゃなくてほかにも同様の所があります。そこで、この末画の延びた筆をさら (板書)で、一字目の末画の「---」が長く伸びるように(末端が少し左に曲って)書かれています。そうして、 まぁこらいう同じやり方のところが、これ一か所どころではないので、つまり、この『聾瞽指帰』 何をみるかといえば、むろん、その重なりでどっちが上かということで、繰返し何回も見たんですが、 それぞれ筆致にその人特有の美的配慮が加えられています。そして、それらは、 その伸びた新しい筆が長く延びて下の字の点と重なった、とこういうふうに解釈ができる 自筆々々とみんな言っているわけですが、どうでしょうか。そこでこれを拝見した 真言のお寺の中では、 いま弘法大師 それを継ぐように 自筆本となれば、 あとから には恐 加

単純な直しとはどうしても思われないのです。 ル 1 ~ の二筆が重なっているときの上下とか、 を使ったお蔭で、筆先の操作のさまざまのからくりの一端と覚しきものを覗くことができました。 加筆の有無の判定などは、難しいとつくづく感じるのですが、 以上述べましたように、墨の色からすれば濃淡の差がなく、 私はこの 同じぐら

ごく細く線が施してあったのです。むろん、今はその透明な顔料は殆どが剝落しています。その剝落のあとに残って 密にもできます。 中に書きますが、 ころが、 うことでちょっと違ってきますが、要するに、紙を表にして折るのか、 には切れてるところがある。これは一か所じゃなくて、十二ヶ所ばかりあります。この線とは一体、 屢々墨が切れていると報告されておりますので、これも確めてみようと致しました。早速覗いてみますと、確かに墨 といわれ、書物でいえば界線があるわけですが、書跡の場合は、紙の漉き目だとか、 の書ということで、『孔侍中帖』 われております。そこで一度覗いてみようと、 それからですね はこれに折目をつけてあるわけです。折ってあるということがはっきり判りました。これはですね、 さっき申しましたように、 さっきの前田家の すぐできます。 ただ、 書の場合は、 実は高野山行の前に、準備と致しまして、もう一つ、前田家の尊経閣文庫に参りまして、 折り方でですね、折りの山がこういうふうに、 たとえばこういう木の角に紙を当てますと、いくらでもできるわけです。 『孔侍中帖』はですね、 ある人は箆のようなものによる空押の線だといいます。書物だと界線内の一行一 行が曲らない為の線で、 を拝見致しました。まことに見事な書と申せます。 出掛けたわけです。そしてもら一つ、その線に墨が交わったところで ついている線は折り目じゃなしに、 紙に密に折目を入れることもあるわけで、 上を向いているのか下を向いているのかとい 裏にして折るのかの違いということです。 以前からその料紙が 空押しの線だとか、 透明な顔料みたいなもので、 さっきの その間隔を粗くも 何なのでしょう 実験してみ いろいろ云 縦簾麻紙 行の

みえます。 ことが明瞭に分ります。そうしますと、ここの、この線と交わったところで、どうして墨がそんなふうに、 ところで、その線の幅なりにですが、墨が切れているのですが、墨の切れ幅に沿って紙が毛羽立っていまして、 の幅なりに切れるだけです。ところが、さき程の大きいルーペで孔侍中帖の字を覗いてみますとですね、線と交わる みると……。そうすると、その溝の幅なりにですね、幅なりに確かに墨は切れます。ただし、これはただきれいにそ 帰ってきて実験をしてみました。で、紙にいまのこういう一つの箆で線を施した。そして、その上に墨で字を書いて うのですが、これはもう二十年も前に出ている見解です。ところが、私、行きまして、それから、実物をみてから*、* のです。さっきのある人が研究した結果では、箆で溝を作って(つまり空押)、その溝と墨が交わると墨が切れるとい 然のことですが、一定のところで、その線と字とが重なり合うところができてきます。 みえるのはごくごく細い黒ずんだ線で、これは墨でもなく、顔料に含まれた水分によって出来たしみというべきで 顔料による細い線があって、それと交りつつ墨書したのだと。ところが、 液体の固まりでまだ剝落しないものが、 るんだろうかと、いうことになります。〈これぁおかしいなぁ〉と、こう思って、その線をよくよくみますと、 種の破損に似た跡という感じがするのです。これは肉眼では殆ど判りませんが、ルーペで拡大してみますと、 めに種明しをしていますように、 で、そういう紙の上に双鉤塡墨による王羲之の字が書いてある、 その細い線の割には、 ずれも非常に細い線だが、所々にですね、さっき申しました……顔料のですね、 交わったところが大きく傷んでいる。 墨ではなく、非常に薄っく、ま、 わづかながら残っているわけです。 薄墨というか、そういう感じの非常に細 おかしいと思って、この線を改めて仔細に点 ということになるわけです。ところが、当 いまはほんのちょっとしか残っていません ははぁと思いました。つまり、 そこに墨の切れが生じている そらいら透明な 壊れてい 元はこの 既には 何か

くるということになるわけです。 やってもきれいなものです。こういうことは、 そのときその上の墨をも伴って剝落したのだと。 とれてるなぁ〉というだけで済んでしまいますが、 普通の空押しなら、 その顔料で引かれた線と、 部も一 緒に剝落するというわけで、ここに一種の破損を生じたと、 なるほど墨は切れますが、そこはきれいで、何も破損が生じる理由は無い。 それと墨とが重なっていたところで、いま申しました顔料が剝落するにしたがって、 ちょっと肉眼だけではこれはとても判りません。 墨の下にあって剝落するから、 ルーペでみますと、 明瞭に破損までみえたところに差が出て まぁそういうふうに取らざるをえな その墨と紙の繊維も結びついている ただ 〈墨がここんと 試みにいくら

聾瞽指帰の紙全体に亘って裏打ちがしてあって、 もう何回やってもですね、そうなるわけ。 の折り目の山を越えて、すぐ続く低いところが、墨の切れ目になるんだと思っていたのです。 ね、これもまた実験してみたわけです。 るんだろうか、 ほとんど判らない。折り目であるかどうかもちょっと解りかねる、 .折れてるんだけれども、どっち側に折れてるんだろうかということです。つまり、紙を折った折り目が上に向 それから、ついでにですね、 さっきの折り目はもう全部伸びてしまいまして、 あるいは下にいってるんだろうかと。ま、これは一体どうしたら解るんだろうか、ということでです 豊図らんや、 紙の折り目の山が下を向いているときだけ墨が切れるんです。これはもう非常に確実で、 **聾瞽指帰のさっきの紙の折り方のことをもう一度申しますが、** 実験します前までは、 一っつも例外は無い。必ず切れるんですね。但し、 それがかなり厚い紙で、 この、 私は折った山が上を向いているとき、 ということなんですが、 いま折り目がどっちを向いているかということ 江戸時代になってからのことです。 現在は二巻の巻子本の まぁそう思っておりま まぁとにかく実験の結 紙の折り方は一 墨筆の運筆 裏打ち いて が 紙 紙

ですから『聾瞽指帰』のときは紙を当てなかったと、まぁそういうことになるわけです。 当てるわけで、薄い小さい細長い紙が箱一杯ありました。 当てるんだそうです。 紙の折れ目の山が接触してごく細い線が、 果が役に立ちましたね。それで、この裏打ちは相当厚いんですが、その紙のここのところにですね、 書陵部に行きまして、 紙を当てないから、 補修係の人にいろいろ聞いてみますと、こういうときには必ず折り目のところに紙を いまの、この線が裏にまで出てくる。裏に出てくるとよくないから、 裏打の紙にまで影響して出てくるわけです。これは必ず出てきております。 装幀の過程における紙の不思議さの一端に触れたわけです。 下を向いた表の

らのは、ここで各丁をめくったわけです。 り目を中心にして左右に対称的に湾入しているように紙が摩滅しています。 す。どうも普通の折り目の線とも違う。それで、さらにですね、この線の、紙の下端のところをよく覗きますと、 と思ったんですが、大体において等間隔でそれがあるのです。そこでその一つを拡大してよぉく覗いてみました。 普通の折り目とはまた違った……、折り目には違いないけれども、少しばかり違った線があるわけです。何だろうな、 いますけれども、 けです。ところが、半分以下の下のところが少ぅし薄黒い。で、上の方はもうきれいに折り目だけになってるわけで して拡大してみますとですね、この線は単に折り目の線なんですから、界線の墨だとか、そういうものは一切無い で二巻あります。この『聾瞽指帰』 んだろうか、ということに、ちょっと私は懸念がありまして、折り目の線を見ておりました。そうしますと、所々に、 それから、もう一つ申しますと、いまは巻子本になっているこの本は一軸が十メートル以上にもなる大きな巻き物 かつてはここを折り目にした折帖であるということが判りました。下の方が少し黒ずんでいるとい が二軸になっているのは、 洋書のときには頁の上の方でめくるんだそうで、何かそういう話をちょ ほんとに弘法大師の平安時代からずっと巻き物だった このことからみて、 今は巻き物になって わ

と聞きましたけれどもね、 いわけで、ですから、黒ずんでいるのは、 西洋人は上のほうで本の頁をめくるんですね。日本人は上でめくるということは普通は 要するに手沢であったわけです。上のところにはそんなものは何も無い、

ということも、

これが折帖説を決定的にしますね。

ば、この紙は薄い紙なんです。 丈夫だろう、ということで、もとは一巻の折帖であったということが判りました。 は折帖でしかも一帖になっていたことになります。だが大分厚くなりそうだ、と思ったわけですが、裏打の紙を除け と下巻の最初の一紙とを合せた幅ですね、その紙の長さを計って合わせますと、ちょうど普通の一丁の紙の幅とほと 疑問が残っておりまして、よぉく調べてみますと、この一巻目と二巻目の、つまり、 んど一致する。と云うことは、かつてはこのところが一緒になって一丁になっていたとみてよく、そうしますと、元 それから、今、二巻になっていますが、ほんとうにはじめから二帖だったんだろうか、ということが、まだ一つ、 薄い紙ですから、折帖にしましても、そんなに厚くはならない。ですからこの点も大 巻物の上巻の最後の半端な一紙

程も申しました通り、中学生がこれを濫用すると非常に害を及ぼすかもしれませんけれども、まぁ皆さん方のような まぁそういうふうに思いますが、 対象を選んでみました。一言で申せば、補助的な道具をうまく使えば非常に有効であるということに尽きます。 以上、だらだらとした話になりましたが、ルーペの使用以前は別としまして、いずれも肉眼だけではわかりにくい 安心してお勧めできますから、 如何なもんでしょうか。 お使いになってみますと、意外に威力を発揮するんじゃなかろうかと、

これまで述べましたように、 先ほど申しましたように、最小限、 私はこのルーペの威力にだいぶ助けられまして、 金沢文庫本の 『白氏文集』だけはこれで全巻見直してみて、 仕事を進めて参りましたし、 その偉力を確

めたいと、そういうふうに思っております。 今日は碌でもない話を長々といたしましたが、これで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございま

した。(拍手)

(平成五年二月四日、斯道文庫講演会)